

2009 年度

米国ジャーナリズム専攻大学院生招へいプログラム  
US-Japan Journalism Fellowship:  
Japan Visit Program for US Post-Graduate Students  
報告書



主催： エマーソン大学  
助成・協力： 国際交流基金日米センター  
アドバイザー： 竹田いさみ 獨協大学外国語学部教授

# 目次

|                                 |    |
|---------------------------------|----|
| 米国ジャーナリズム専攻大学院生<br>招へいプログラムについて | 1  |
| 事業内容                            | 2  |
| 参加者                             | 5  |
| 参加者による日々の感想                     | 7  |
| 研修が終わって：参加者の感想                  | 12 |

## 米国ジャーナリズム専攻大学院生招へいプログラムについて

米国ジャーナリズム専攻大学院生招へいプログラム（US-Japan Journalism Fellowship: Japan Visit Program for US Postgraduate Students）は、米国の将来を期待されるジャーナリストを志望する学生に対し、日米関係に対する意識を高める目的で、創設されたパイロット事業です。これから世界で活躍する記者や編集者に、日米関係と米アジア関係により関心を持っていただくのがその目的です。参加者には、日本の各界のリーダー、学生、市民との出会いを通じて、日本人との絆を深めると同時に、微細なニュアンスに至るまでより正確かつ包括的に日米関係を伝える見識を養うことが期待されています。

米国北東部の4つの名門校のジャーナリズム専攻課程に所属する優秀な6名の参加者学生（フェロー）が選ばれました。参加校は、コロンビア大学、ニューヨーク大学、メリーランド大学、エマーソン大学の4校です。6名の参加者はニューヨーク市で集合し、日米関係と日本の文化に関する講習を受けてから、2009年8月16日から25日の10日間にわたり一緒に日本をめぐりました。

米国ジャーナリズム専攻大学院生招へいプログラムは、国際交流基金日米センター（CGP）とエマーソン大学、獨協大学の竹田いさみ教授の共同事業です。CGPが渡航の手配、エマーソン大学が米国側の調整および予算管理、竹田教授がアドバイザーとして事業内容と学生の活動全般への助言を行いました。国際交流基金のニューヨーク事務所からも協力しました。

## 事業内容

2009 年春に本パイロット事業に参加するジャーナリズム修士課程を有する大学院の選抜を行いました。その結果、5 月 15 日に 4 校の修士課程が選ばれ、各校に対し、参加する学生を募集・選抜し、応募書類を提出するよう求めました。エマーソン大学が書類をとりまとめ、CGP の承認を得るため日本に送付しました。最終的に、6 月 22 日に 6 名の学生にフェローシップが授与されました。

7 月 24 日から 25 日にかけて、参加者に対するオリエンテーションがニューヨーク市で開催されました。学生たちは日本やアジアに住んだ経験が無いため、このオリエンテーションは彼らにとって訪日の貴重な準備の機会となりました。オリエンテーションの目的は、日本滞在を満喫し、有意義なものにするための情報を提供することです。日本文化や日米関係に関する講習を受けながら、参加者はお互いに親睦を深め、日本での友人関係づくりに専念できる体制をつくりました。

そして、いよいよ待ちに待った日本訪問です。8 月 16 日に東京に到着してからも、毎朝の朝食ミーティングでその日の予定表を受け取り、その日に会う人物や話し合うテーマについてブリーフィングを受けました。

以下が日本滞在時の主な行事です。

8 月 17 日——CGP が主催する国際関係大学院生招へいプログラムの参加者と面会し、国際交流基金の小倉和夫理事長らから挨拶を受けました。昼食後は日本モルガン・スタンレー社のロバート・フェルドマン博士のもとを訪れ、日本経済が直面する課題について講義を受けました。夕方には在日米国大使館を訪れ、ジェームス・ズムワルト首席公使の歓迎を受けました。夜は新宿ワシントンホテルでのレセプションに参加し、ジャーナリスト、大学教授、国際交流基金職員等との交流を楽しみました。

8 月 18 日——午前中は防衛大学校の彦谷貴子教授から日本の政治体制について講義を受けました。お好み焼きの昼食を味わった後に、日本放送協会（NHK）を訪れ、解説委員長の藤澤秀敏氏と NHK 国際放送局ニュースの編集長の中村龍一郎氏、将来の海外特派員たちと面会し、時代劇ドラマの撮影現場を見学しました。夕方からは原宿と渋谷を散策しました。NHK、渋谷、原宿には竹田先生が同行し、街中を案内してくれました。

8 月 19 日——横須賀に移動。防衛大学校と米軍海軍基地を訪れました。防衛大学校では、五百旗頭真校長と山口昇教授から日米同盟に関する講義を受けてから、彦谷教授の案内で校内を見学しました。その後、米軍基地でダニエル・ウィード司令官に面会しました。午後には財団法人地球環境戦略研究機関（IGES）を訪れ、森秀行所長と田村堅太郎研究員より、地球温暖化防止に対する日本の取り組みに関する講義を受けました。

8 月 20 日——築地市場で寿司の朝食。その後、早稲田大学の瀬川至朗教授と同氏の下でジャーナリズムを学ぶ大学院生と共に朝日新聞社を訪問。朝日新聞社ジャーナリスト学校事務局長の五十嵐浩司氏の案内で、報道局を見学し、未来の海外特派員たちに会いました。午後は早稲田大学大学院政治学研究科ジャーナリズムコースを見学しました。夜は早稲田大学の瀬川教授、ハンス・グリーメル教授、NHK の高比良歩ディレクターと毎日新聞の花岡洋二記者らと夕食をとりました。

- 8月21日——午前中は外務省の兒玉和夫外務報道官と面会。その後、明治大学の森川嘉一郎准教授と昼食をとりながら、「オタク文化」についてブリーフィングを受けました。また、アニメ制作会社マッドハウスを見学しました。その後、日本外国特派員協会（FCCJ）にて、AP通信のトモコ・ホサカ記者の主催で、アジア系アメリカ人の特派員のグループと一緒に夕食をとりました。
- 8月22日——新幹線で神戸に移動。人と防災未来センターを訪れ、阪神淡路大震災について学びました。午後は毎日新聞の中尾卓英記者の紹介でかつての被災者と面会し、被災地に立つ慰霊碑の前で涙を流しました。夜は神戸出身で国際交流基金日米センター事務局長を務める小川忠氏の案内で神戸の「ダイヤモンドの夜景」を楽しみ、三宮で夕食を共にしました。
- 8月23日——姫路城を見学後、京都に移動。国際交流基金日米センター職員、竹代明日香氏の案内で清水寺、錦市場、祇園地区をまわりました。
- 8月24日——午前中は京都嵐山を散策。午後は錦織で有名な龍村光峯工房でお茶を楽しみました。夜は参加者たちのためにお別れの夕食会が開催されました。
- 8月25日——米国に向けて日本を出発。

## 21年度 米国ジャーナリズム専攻大学院生招へい事業 スケジュール

|        | 月日      | 場所    | 主な内容                                                                       | 講師・訪問機関等                                                                                                                      |
|--------|---------|-------|----------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| Day 1  | 8月16日 日 | 東京着   |                                                                            |                                                                                                                               |
| Day 2  | 8月17日 月 | 東京    | オリエンテーション                                                                  | 国際交流基金「さくら」                                                                                                                   |
|        |         |       | 国際交流基金小倉理事長表敬                                                              | 於 JFIC2階「さくら」                                                                                                                 |
|        |         |       | イントロダクション講義①<br>「日本経済の状況と課題」                                               | ロバート・フェルドマン氏<br>(モルガン・スタンレー証券 マネーシング<br>ディレクター)                                                                               |
|        |         |       | 米国大使館表敬 ズムワルト臨時代理大<br>使表敬及び若手米国人外交官との意見交<br>換・交流                           | 在京米国大使館                                                                                                                       |
|        |         |       | 合同歓迎レセプション<br>(APSLA/Journalism)                                           | 新宿ワシントンホテル                                                                                                                    |
| Day 3  | 8月18日 火 | 東京    | イントロダクション講義②<br>「日本の政治状況」                                                  | 彦谷貴子准教授 (防衛大学)                                                                                                                |
|        |         |       | NHK 訪問：スタジオパーク⇒大河ドラ<br>マスタジオ⇒ワールドニュース⇒藤沢解<br>説委員長講義⇒NHK 若手記者との意見<br>交換     | NHK                                                                                                                           |
|        |         |       | 自由行動                                                                       |                                                                                                                               |
| Day 4  | 8月19日 水 | 神奈川   | イントロダクション講義③<br>「日米・アジアの安全保障について考え<br>る～日米外交史」                             | 五百旗頭真校長、山口昇教授 (防衛大学)                                                                                                          |
|        |         |       | 米軍横須賀基地見学                                                                  | 彦谷貴子准教授 (防衛大学／安倍フェロー)<br>が同行                                                                                                  |
|        |         |       | イントロダクション講義④<br>「地球環境問題に対する日本の取組み」<br>森秀行副所長による全体説明および田村<br>賢太郎研究員によるレクチャー | 地球環境戦略研究機関                                                                                                                    |
| Day 5  | 8月20日 木 | 東京    | 築地市場                                                                       |                                                                                                                               |
|        |         |       | 朝日新聞社見学、朝日新聞記者との討論                                                         | 出席者<br>中井 大介 (編集局・社会グループ記者)<br>井上 未雪 (編集局・外交国際グループ記者)<br>野村 彰男 (ジャーナリスト学校長)<br>五十嵐浩司 (ジャーナリスト学校事務局長)<br>川崎 剛 (ジャーナリスト学校主任研究員) |
|        |         |       | 早稲田大学大学院政治学研究科ジャーナ<br>リズム<br>学生との交流                                        | 早稲田大学学生実習室<br>モデレーター 瀬川教授・<br>元 AP 通信社 Greimel 氏                                                                              |
| Day 6  | 8月21日 金 | 東京    | 外務省 児玉報道官 表敬訪問<br>(国際報道官 稲岡氏、川口氏同席)                                        | 外務省                                                                                                                           |
|        |         |       | 明治大学 森川准教授 講義<br>「ジャパニーズ・ポップカルチャー」                                         | 国際交流基金「さくら」                                                                                                                   |
|        |         |       | アニメーション スタジオ視察                                                             | 株式会社 マッドハウス                                                                                                                   |
|        |         |       | 外国人記者との夕食会                                                                 | 外国人記者クラブ                                                                                                                      |
| Day 7  | 8月22日 土 | 神戸    | <神戸に移動><br>人と防災未来センター視察                                                    | (日本の震災について)                                                                                                                   |
|        |         |       | 災害報道について講義<br>震災被災者より震災体験語り                                                | たかとりコミュニティセンター<br>出席者：毎日新聞神戸支局 中尾氏、<br>震災体験 中島喜一様・美恵様、瓜谷様                                                                     |
| Day 8  | 8月23日 日 | 姫路    | 姫路城 (午前中)                                                                  | (日本の建築・伝統文化について)                                                                                                              |
|        |         | 京都    | (午後) 京都市内視察<br>(錦市場、新京極商店街、八坂神社、清<br>水寺、祇園界隈)                              |                                                                                                                               |
| Day 9  | 8月24日 月 | 京都    | 総まとめ (会議)                                                                  |                                                                                                                               |
|        |         |       | 嵐山散策                                                                       |                                                                                                                               |
|        |         |       | 龍村織工房見学及び龍村氏によるレク<br>チャー                                                   | 龍村光峯氏                                                                                                                         |
| Day 10 | 8月25日 火 | 解散・帰国 |                                                                            |                                                                                                                               |

## 参加者

### ヘーリー・スウィートランド・エドワーズ (Haley Sweetland Edwards)

コロンビア大学ジャーナリズム大学院の最後の1年は国際政治学を専攻。紛争地域におけるデジタルメディアの役割を中心に論文を執筆しました。修士論文ではインド領カシミール地域を取材しました。昨年秋に大学院に戻る前に、シアトル・タイムズの記者として勤務し、2008年の米国大統領選挙から自然災害、地元で行われたチワワレースなど、多彩なテーマを取材しました。カンボジア、ベトナム、シリア、ヨルダンから同紙に、紀行文を寄稿したこともあります。2005年にイエール大学を卒業（哲学と歴史の学士号を取得）した後は、国内外の文化と政治を取り扱う季刊誌 *The Internationalist* の創設者・編集者の1人として活躍しました。出身地はカリフォルニア州レイクタホ。幼少期の一部を中米で過ごし、自転車で米国とカナダを2回横断した経験があります。

### サンドラ・ガルシア (Sandra Garcia)

ニックネームはサンディ。マサチューセッツ州ボストンのエマーソン大学で放送ジャーナリズムの修士号を取得。さまざまなインターンシップやユニークな経験を通じて、書くことへの情熱を持つようになりました。最も記憶に残る出来事は2008年夏に中国・北京のオリンピックメディアセンターで働いたこと。外交、特にアジア研究への関心が日本を訪れるきっかけとなりました。出身地はフロリダ州マイアミ。これまでの人生のほとんどをメリーランド州ボルティモアで過ごしました。アウトドア派の両親と米国東部の各地を旅行した経験があります。高校、大学時代はフィギュアスケート競技とダンスに没頭しました。犬好きでボランティア精神が旺盛。ホームレスの人のために幼少からボルティモアの支援事業 (Helping Up Mission) に参加していました。2003年にペンシルベニア州ミードヴィルのアレゲニー大学にて、コミュニケーション学の学士号を取得しています。

### キャサリン・クリクスタン (Catherine Krikstan)

メリーランド大学フィリップメルリ・ジャーナリズム専門大学の大学院生。メリーランド州のセント・メアリーズ大学を優秀な成績で卒業しています（英文学で学士号を取得、副専攻はアジア研究）。大学時代は学内のアジア研究クラブの代表として活躍し、アジア研究賞 (Asian Studies Award) を受賞しました。在学中の1学期を香港の嶺南大学で過ごし、その間にベトナム、タイ、中国本土を旅行しました。将来は雑誌の執筆者を志望。出身地はメリーランド州シルバースプリングです。

### ジョセフ・リン (Joseph Lin)

アジアに関して幅広い知識と関心を持つ写真家であり、マルチメディア・ジャーナリスト。コロンビア大学ジャーナリズム大学院でジャーナリズム学の修士号を取得。その後、建築学を2年間学び、写真家に転向。プラット・インスティテュートに入学し、写真の美術学士を取得。人生の転機が訪れたのは2007年秋。中国各地を3カ月間かけてまわり、古い中国と新しい中国のコントラストを写真に捉える中で、チベットの砂埃から上海の交通渋滞までありとあらゆる現象を目撃しました。現地で出会った人々と目にした風景の忘れられない記憶がアジアと旅に対する情熱となっています。

### キャスリーン・マッサラ (Kathleen Massara)

ニューヨーク大学の文化ジャーナリズム (Cultural Reporting and Criticism) 課程の修士学生で *The Paris Review* の見習い編集者 (インターン)。2004年にマックギル大学で政治学の学士号を取得。2005～6年に東京で英語を教えながら、内田真理子氏の博士論文と、2006年国際文化政策研究会議 (ICCPR) 第4回年次会合 (於オーストリア・ウィーン) で行った講演「文化産業と政府——日本の“コンテンツ”政策の事例 (Cultural Industry and the Government: The Case of 'Kontenzu' Policy in Japan)」のためのプレゼンテーション用資料を編集しました。米国に帰国した後も、東アジアに興味を持っています。研究の関心領域は、日本における文化とアイデンティティの形成、米国の外交政策に関する諸問題、アジア地域主義などです。

**マイケル・ミラー (Michael Miller)**

ジャーナリストとして現在、AP 通信メキシコシティ支局でインターンをしています。ニューヨーク大学でジャーナリズムとラテンアメリカ研究の2つの修士号を取得。その前はシカゴ大学で哲学とスペイン語の学士号を取得しています。2007年にタイ、カンボジア、日本を旅行したのをきっかけに、アジアの文化、政治、市場に関心を持つようになりました。北アイルランド、スペイン、ベネズエラ、メキシコ、米国で暮らした経験があります。ニューズウィーク・インターナショナル、New York Daily News、AP 通信、Brooklyn Rail など、さまざまな出版物に寄稿しています。出身地はミズーリ州コロンビア。そこで幼少期を過ごしました。20代のあいだはガールフレンドのハンナと各地を回りながら、現地の様子を報道したいと考えています。

## 参加者による日々の感想

### 【8月18日】ジョセフ・リン

午後のNHK訪問は日米メディアの構造的な違いを理解するのに非常に役立ちました。日本のメディアはキャリアパスが直線的であるのに対し、米国のメディアはより柔軟なキャリア形成が可能であり、それが一般的です。

日本では、ジャーナリスト志望の学生がそれぞれ希望する会社の入社試験を受けます。一度入社すると、大抵は定年まで同じ会社にいます。これは65歳までの雇用確保措置を義務化する終身雇用制または65歳定年制によるところが大きいのですが、そのことは日本人の安定志向を反映しているのと同時に、ニュースメディアのようなダイナミックな分野にはそぐわない硬直性を生み出す原因ともなっています。

ニュースメディアは、その特性からして、情報の収集と発信をするものと定義できます。日本のメディアに見られる封建的な構造、社員が実質的に会社に縛られる構造は、外部の人材を獲得することで発想力を豊かにする機会がほとんど皆無であることを意味します。社内で新しい風を起こそうにも、終身雇用に基づく人事の壁が大きく立ちちはだかります。

たとえばNHKでは、新入社員はまずジャーナリズムの基礎知識を徹底的に教え込まれます。それから現場に配置されますが、その現場というのがほとんどの場合、東京などの主要都市から遠く離れた地方支局です。そこで地元のニュースを報道しながら、ジャーナリストの仕事を現場で体験します。そして数年後によく、東京など年長のジャーナリストが集まる大きな支局に異動するチャンスを得ます。米国でも駆け出しのうちは似たような仕事を与えられますが、NHKの体制は、新人ジャーナリストが最もメンターを必要としている時期にベテラン記者から実質的に遠ざけるようになっています。

このような構造は、中高年の管理職層の肥大化の原因ともなっています。余剰な人員を削減できないため、ボトルネックが生じ、組織を再活性化できるような新しい人材の成長が阻害されるのです。政府から補助金が出るNHKはこうした硬直的、封建的な組織であり続けても生き延びるかもしれませんが、米メディアが急激に衰退した前例が示すように、民放各社はこのままでは近いうちに行き詰るでしょう。

### 【8月19日】ヘーリイ・スウィートランド・エドワーズ

面会その他の行事が盛りだくさんだった1週間の中でも、この日はとりわけ忙しい1日でした。最も印象深かった訪問先は、横須賀の米軍基地訪問です。案内役のダン・ウィード司令官はとても親切で、一国（米国）が大規模な軍事力を他国（日本）に配備するのに伴う諸問題について率直に語ってくれました。私が特に関心を持ったのが、若い米軍兵士が日本で犯罪行為に及んだ際に生じる外交問題についてです。ウィード司令官は、過去数年間で米兵による日本人強姦・殺人事件が少なくとも2回あったと述べました。このことを聞いて、私はとても不快な気持ちになりました。けれど、これは日米の複雑な安全保障関係を理解する上で絶対に知っておかねばならない事実です。この訪問当時、日本は島国である自国の安全を守るため、米国に年間60億ドルを支払っていました（民主党が政権を握ったので、この金額は変わるかもしれませんが）。この日本側の負担と、結果的に生じている力の不均衡は、日本国内だけでなく、米国のいくつかの孤立主義的な考えグループの間で議論的になっています。この複雑な関係についてすべて理解できたわけではありませんが、ウィード司令官に会って話を聞くことができ、日本における米軍の圧倒的な存在感を自分の目で確かめることができ、よかったと思います。

## 【8月20日】キャサリン・クリクスタン

私は、ジャーナリズム業界が急速かつ未曾有の変化を遂げている最中に、大学院を卒業し、世に出ていくことになります。そのため、ここ数カ月ほどは雑誌・新聞業界の将来に対する不安が頭から離れませんでした。ですから、この招へいプログラムを通じて日本がこの問題にどう対処しようとしているのかを知りたいと思いました。

1世帯あたりの定期購読紙数が1紙を越え、毎日、合計5千万部を越える新聞が刷られ、未だに夕刊が発行されている日本でさえ、ジャーナリストたちが将来に不安を抱いていることがわかりました。例えば、朝日新聞社を訪問したとき、朝日新聞の定期購読者の平均年齢が57歳だということを知りました。会社のビジネスモデルを変えないことには、この年齢は上昇の一途を辿ると予想しているそうです。日本の若い世代の間では（米国の若者と同じく）、新聞よりも携帯のほうが、情報収集源として人気が高くなっています。

しかし、私が朝日新聞社で見た新聞・雑誌の未来には、希望も感じられました。というのも、メディアの世界に起きている変化に降参するのではなく、誰かがニュースを集めねばならないという使命感を持って動いているように見えたからです。この訪問によって新聞・雑誌の未来がはっきり見えたわけではありませんが、競合他社より報道の質を高める、将来に備えた支援プログラムを実施するなど、さまざまな方法を通じて報道という仕事を守ろうとする朝日新聞社の決意が、私に自信とやる気を与えてくれました。

## 【8月21日】マイケル・ミラー

「あなたはリチャルト・カプシチンスキーのようですね」と言うと、兒玉和夫外務報道官は困惑した顔をしました。私は彼に、「この有名なポーランドのジャーナリストは外国を取材するときの心得として、『中立性を維持する必要はない』『取材する国についての資料を読みまくれ』『読者に対してできるだけ公平であれ』と言っています。あなたが仰ったことは、この3つの原則を見事に表していると思います」と説明しました。よい報道をするためには、記者が取材国の雰囲気、国民の態度や、懸念を肌で感じる必要がある。兒玉氏はそう言ったのです。

今回の質疑応答の口火を切ったのは、当然ながら6名の米国人ジャーナリストの卵ではなく、兒玉氏でした。彼はまず、こう問いかけました。「日本駐在の海外特派員は、もともと自国にある日本に関する偏見を強化するような報道や切り口を（本国の）編集者から求められます。彼らはその罫を、どの程度避けることができているでしょう？」兒玉氏はそれから1時間半にわたって、海外特派員にはある国で現在起きていることを「公平で偏見のない」やり方で、他の国の人々に正確に伝えるという大きな責任があることを、意図的でないしろ、カプシチンスキーを彷彿とさせる表現で説明してくれました。「これができない人に反論するのが私の仕事です。」彼は笑顔でそう付け加えました。報道に偏りがあった外国の新聞社には、電話して論説で訂正を求めるそうです。

「西洋のメディアは、善意にあふれている場合でも、（本国の）『東洋社会や日本社会に対する先入観を満たすためだけに』、東洋の特殊性を強調した報道をしがちです」兒玉氏はそう言って、ニコラス・クリストフがニューヨーク・タイムズに発信した記事を例に挙げました。それは、日本における女性の扱いや女性の権利を非難した内容でした。「日米では文化も男女の関係も大きく違っているのに、この記事はそのことを考慮せず、日本を米国と同じ鋳型にはめて論じています」と兒玉氏は批判しました。

彼の批判はフェアでしょうか？確かに西洋のジャーナリストは駐在する国についてできるだけ多くを学び、偏見のない目で見なければなりません。しかし、グローバリゼーションの時代に入り、価値観も相対的なものが減り、普遍的なものが増えていきます。人権も普遍的なものに見なされています。米国人ジャーナリストが日本の男女の賃金格差を指摘し、中国の言論規制を報道し、中東諸国に宗教の自由を呼びかける。それは批判されるべきことなのでしょうか？

新聞社や通信社は急速に舞台を世界に広げ、国際化しています。ブッシュ政権は人権という言葉を目くらましに使ってイラクを侵略しましたが、それでも今は昔より人権を論じやすい世の中になっています。カプシチン

スキー自身も言ったように、海外特派員は読者と取材対象の国との間という独自の立場で報道を行います。しかし海外の読者が増えている現在、各国政府は国際社会で主流ではない文化的風習が批判を受けやすくなっているという現実に対応しなければならないでしょう。

#### 【2009年8月22日】 サンドラ・ガルシア

神戸への旅は、今回の滞在の中で最もよい思い出のひとつになりました。私は旅をするとき、単なる観光旅行で終わらせないようにします。旅の間は、地元の人たちと知り合い、話を聞き、彼らの生活の一部になるよう努めています。今日の神戸への旅は、この姿勢が最高にすばらしい経験をもたらしてくれました。

まず、「阪神・淡路大震災記念 人と防災未来センター」を訪れ、1995年に起きた阪神・淡路大震災がもたらした被害について学び、地震を追体験し、震災当時の写真や資料を見ました。この震災がもたらした被害を知り、胸が熱くなりましたが、その犠牲の大きさを本当には理解できていませんでした。

次に訪問した「たかとりコミュニティセンター」では、グループ全員で、被災者の方2、3名から当時の話を聞かせてもらいました。胸が締め付けられる話ばかりで、そのとき部屋の中にいた人全員が目を潤ませていたと思います。私は、大震災の影響で、これらの人々の人生が完全に狂ってしまったことを少しずつ実感し始めました。完全にその人の立場に身を置いて考えることは不可能かもしれませんが、できるだけそうするよう努力しました。

忘れられない出来事が起きたのは、この後です。今日は朝の6時15分に起きたため、耐えられないほどの眠気が襲ってきました。みんな、この見学が終わったら早くホテルに帰って寝ようと思っていました。ところが、センターを去ろうとしたとき、話をしてくれた被災者の男性が大震災の慰霊碑を見にこないかと誘ってくれました。奥さんの名前が刻んであるそうです。どう考えてもこんな申し出を断ることはマナー違反になります。私たち全員、慰霊碑を見にいくことにしました。恥ずかしながら、私も断れないという理由だけで同行したのです。

慰霊碑はとても美しい場所にありました。大きな噴水があり、階段を降りると、その下にある円形の部屋に着きました。天窓越しに見上げると、上にある噴水の水しぶきに日の光がまぶしく反射していました。部屋の壁には、震災で命を落とした6,434名の名前を刻んだプレートがずらりと並んでいます。それを見た瞬間、私の身勝手さに気づきました。この男性は今日まで会ったことがない私たちに、自分の人生のこれだけ大事な部分を伝えようとしてくれた。それなのに私ときたら、早く帰って寝たいとばかり思っていたのです。

男性は奥さんの名前が刻まれたプレートを示し、微笑みながら、名前の上を何度もなでました。とても悲しい微笑みでしたが、その瞳には誇りが満ちていました。「これが私の一生の仕事になりました」その言葉を聞いて、涙があふれました。他のみんなもそうだったと思います。

自分の経験を人に伝えたい。心からそう望み、実践する彼は信じられないほど強い人でした。別れる前、私は彼に、奥さんの思い出を話してくれたことに心からお礼を言いました。すると、彼は私が泣いているのを見て、なぐさめの言葉をかけてくれたのです。その無私の思いやりに、私は激しく心を打たれました。

ホテルに戻る車の中で、私は旅を観光旅行に終わらせないという自分の目標と、そのためにやってきたことを考えました。「阪神・淡路大震災記念 人と防災未来センター」に行って展示物を眺めるだけなら観光旅行と同じですし、せっかくすばらしい場所にいるのにホテルに帰って寝ては観光旅行と変わりません。私がやりたいことは、土地の人々と話し、彼らの生活に触れ、本当に彼らの世界の一部になること。この男性の話を聞くことで、彼の奥さんの経験を垣間見ることができただけでなく、自分についても予期せぬ学びを得ることができました。

### 【8月23日】キャスリーン・マッサラ

今日はユネスコ（UNESCO）の世界遺産である姫路城を訪れました。曲がりくねった道を登って本丸に向かいながら、これじゃあ侵入者が迷うわけだなあと実感しました。案内してくれたガイドさんの説明によると、昔は天守閣の壁に開けてある穴から、侵入してきた敵に熱湯を浴びせていたそうです。

同じ城でも、ヨーロッパの石造りの古城の重厚さに比べ、木造の姫路城は面白いほど無防備に見えました。天守閣には2、3歩ごとに大きな窓が開いていました。ヨーロッパの要塞ではあり得ないことです。

私たちは初めて日本の伝統建築を見学し、周りの自然と建築との調和を実感することができました。近くの本立からそよぐ心地よい風が、お城の窓から入ってきます。そのやさしい風に吹かれていると、長旅の疲れが癒される気がしました。

### 【8月24日】ジョセフ・リン

日本でいちばん人気のスポーツは野球で、そのなかでも高校野球の人気は大変なものです。毎年、夏になると日本全国のものすごい数の高校から選抜された強豪チームが神聖な甲子園球場のグラウンドに集結し、全国高校野球選手権大会が開幕します。球場の名前をとって甲子園と呼ばれるこの大会は、毎年国民の注目をさらいます。甲子園のニュースが新聞のヘッドラインを飾り、国営放送のニュース番組で、試合の結果が毎日報道されます。

今回の滞在中、私は幸運にもこの日本独自の文化を体験することができました。満員の観客が選手の一球、一打も逃さぬよう、固唾を吞んで試合の進行を見守ります。その熱気たるやすごいものでした。どの学校のときもチューバから和太鼓まで、あらゆる楽器を揃えたブラスバンドが現れ、その後ろに何百人もの応援団がずらりと並んで、両手にペットボトルを持ち、喝采を送ります。自分たちの学校がよいプレーをしたときや、打順が回ってきたときは、全員が同じリズムでペットボトルを打ち鳴らし、味方チームを応援します。甲子園の観客たちは坊主頭の球児の中に、日本人が共有してきた価値観を見ていました。

鎧と刀の代わりにバットとグローブで身を固め、名誉とプライドをかけて戦場であるグラウンドに立つ球児たち。その姿は日本人好みの禁欲的な武士道精神を表しています。彼らは年齢以上の成熟ぶりとスポーツマン精神を示し、一糸乱れぬチームワークを全国に披露します。ゴロの球にも全力で走り、アウトでも一塁に向かってダッシュする。どんなありふれた場面でも決して手を抜かない彼らを見たら、ほとんどのメジャーリーガーは恥じ入ることでしょう。試合のあらゆる場面で最善の努力をする姿勢には、日本人があらゆる方面で発揮してきた勤勉さが表れています。

甲子園でよく使われる作戦にも、日本的な物の考え方がよく表われていました。例えば犠牲バント。チームメートを次の塁に出すために、わざとアウトのボールを打つ戦法です。このような全体の利益のために自分を犠牲にする行動は、日本社会に共通して見られます。個人は、企業のような大きな組織のために自分を犠牲にすることを期待されます。

国家の精神を体現するイベントはめったにありませんが、甲子園は日本を最も純粋な形で表していました。

### 【8月25日】ヘーリイ・スウィートランド・エドワーズ

今日は日本滞在の最終日。残念ながら、私が最初に日本を発つことになっていました。前の晩、カラオケバーで約束したように、朝の7時15分にホテルの朝食バイキングで集合しました。驚いたことに、7時20分には全員がベッドから何とか這い出して、私にさようならを言いに来てくれたのです！（もちろん、昨夜の「アクティビティ」のせいで、みんな睡眠不足の上、脱水症状で、そろって頭痛を訴えていましたが、まあ、それはよしとしましょう）今朝、全員の眠そうな顔を見ることができて、どんなにうれしかったことか！その30分後に私はバスに乗り、ポール、ジュリー、素晴らしいガイドであった竹代職員、その知性と頼りがいのある人柄でグルー

プを守り、導いてくれた竹田先生に、日本の流儀にのっとり、全員の姿が見えなくなるまで手を振り続けました。みんなの笑顔が見えなくなったとき、私はシートの背に身体を預け、少し涙ぐみました。この滞在中に、米国人も日本人も含め、これほどたくさんの人々と親しくなるとは想像していませんでした。私は彼らに敬意を抱き、感銘を受け、一緒に過ごす時間を心から楽しみました。日本を発つ日はほっとする日になるはずでした。みんな15時間のフライト中にぐっすり寝るのを楽しみにしていましたから。けれど、実際は悲しく、信じられないほど素晴らしい機会を与えられたことに感謝する日になりました。

## 研修が終わって：参加者の感想

ヘーリー・スウィートランド・エドワーズ

「それで、日本はどんな国だったの？」研修から帰って以来、幾度となくこう聞かれました。私はその度に違うことを言いました。「暑いわよ」「美しい国だった」「想像とはまったく違う国よ」

何よりも、日本は米国と同じくらい多様性があり、色々な人が住んでいる国でした。今となれば、そんなことは当然だと思えるのですが、米国人は日本を単一体だと捉えがちです。つまり、日本人はみんな小柄で礼儀正しく、寿司や漫画が好きといった単一的なイメージで見ている人が多いのではないのでしょうか。もちろん、日本のように古い文化を持ち、知的多様性のある国を、このようなイメージで括るのはまったくおかしいことです。姫路城を訪れ、切腹の伝統について学んだあと、京都の祇園でおしゃれな格好のティーンエージャーと会話を楽しむ、そんな楽しい経験もできました。階層意識、敬意、きれい好きなど、日本文化に共通して見られる特徴はありますが、滞在中に多種多様な知的体験を持つことができて本当によかったと思います。

また、私が最も楽しんだイベントは明治大学の森川准教授による日本のポップカルチャーについての講義です。マンガのファンであり、学術的に研究する学者でもある彼の視点は驚くほどユニークで、興味深いものでした。森川先生によると、西洋人は一部のマンガのように、登場人物を性の対象として描いてある作品を見ると不快な気持ちになったり、不安になったりするとのことでした。私たちのグループもそうでした。この講義の後、私たち6人は帰りのバスの中で熱い議論をたたかわせました。日本の若い男女がセックスに対するプレッシャーを感じるようになったのは、米国の影響もあるのでしょうか。最近、マンガのキャラクターが登場するアダルトゲームの人気の高まっているそうですが、森川先生はセックスに対するプレッシャーが、こうしたゲームの市場を生み出したと言っていました。彼が指摘した問題のすべてに納得しているわけではありませんが、これまで考えたこともなかった日本文化のいくつかの側面について思いをめぐらす機会を持てたことに感謝しています。

サンドラ・ガルシア

この研修旅行の目標は、さまざまな海外特派員と会い、将来のキャリアにつながる人脈を築き、私がジャーナリストとして果たす役割が、米国の海外の国々に対する認識や、外国の米国観にどのような影響を与えるかについて学ぶことでした。これらの目標は予想以上にうまく達成することができました。けれど私は日本から、ずっと多くのことを持ち帰ることができました。

研修中、私の口から何度「日本ってすごいよね！」というセリフが出たことでしょうか。グループの誰に聞いても、私が1日に2回はこうつぶやいていたと言うことでしょうか。特にすごいと思ったことをいくつか紹介します。

まずは小さなことから。小さなプラスチックの容器に入ったジャムのフタがなかなか剥がれなかったときのことです。ポールが「ここは日本だから、何か仕掛けがあるはずだよ」と言いました。容器をひっくり返してみると。ありました！容器をふたつに折り曲げると、前のほうに口が開いて、そこからジャムが出てくる仕組みになっていたのです。これなら簡単にパンに絞り出すことができ、手も汚れません。

もっと大きなことにも感銘を受けました。例えば時間を守ることの重要性を国全体が理解していることです。正午に始まる会議があれば、参加者全員が11時50分までに到着しています。1時30分が終了時間であれば、話していた人は1時29分に話を終えます。小さなことに思えるかもしれませんが、全員がこのように行動すると、時間を非常に有効に使えらると思います。日本では実際に、時間が非常に有効に使われています。

東京の面積はニューヨークの3倍ありますが、そんな大都市とは思えないほど、どこもかしこも掃除が行き届いています。街中に特にゴミ箱が多いわけではありませんが、人々は道端にポイ捨てしたりせず、捨てられる場所に来るまでゴミを持って歩きます。これも小さなことに思えるかもしれませんが、全員がこのように行動すると、東京のような清潔な街が生まれるのです。

首都圏の人口は3500万人以上ですが、世界で最も犯罪率が低いエリアのひとつです。人々は自転車にカギもチェーンもかけずに路上に停めています。あちこちに駐輪場があり、利用者は置いた自転車が帰ったときにもそこにあることを疑いません。私はずっと都会に暮らしてきたので、あまり治安のよさを期待しなくなっているのかもしれませんが、しかし、こうした東京の状況にはとても驚きました。ある晩、友人の友人と夕食をともにした時のことです。その人は面白そうにこう言いました。「額に1万円札をはりつけたまま通りの真ん中で酔って寝てしまっても、朝起きたときに1万円札は残っているよ。おまけに、通行人に踏まれないように、誰かが道の脇のところまで運んでくれていると思う」

周りのことにあまり注意を払わず、自分の役割だけに集中するのは、アメリカの個人主義的なやり方なのかもしれません。けれど、みんなで協力し、共通の空間を互いに尊重することがもたらす成果には目を見張るものがありました。ここで、もう一度言いましょう。細かいことから大きなことまで、日本はすごい！私たちはこの生活水準を米国に持ち帰るべきかもしれません。

#### キャサリン・クリクスタン

国際交流基金の小倉和夫理事長は研修初日のあいさつで、日本は近年、自国のアイデンティティを確立するための小さな一歩として、日本と他の国々との相違点に注目するようになってきたと仰っていました。滞在中、小倉理事長のこの言葉がずっと私の心に残っていました。毎日、海外特派員になった自分を想像して、自問自答を繰り返しました。「日本そのものが国家としてのアイデンティティを模索しているというのに、私がどうして日本のアイデンティティを理解できるのだろうか？」

だから行く先々で、「日本」の定義を探しました。日本という国を形作るものは何でしょう？過去の歴史でしょうか？その文化的な重要性により、国内外から保存の必要性を認められた姫路城のような名所旧跡でしょうか？それとも歌舞伎から絹織物まで、現在まで脈々と受け継がれてきた伝統芸術なのでしょうか？もっと目につきにくいもの、たとえば私がたびたびへまをしでかした社会慣習などでしょうか？もしくは、ファッションとか、アニメとか、野球選手のような目に見えるものでしょうか？

もちろん、この中の要素のひとつだけが日本をつくっているわけではありません。これら全部と、私がどれだけ時間をかけても見切れない無数の要素が合わさって日本をつくっています。しかし、私は日本で出会った数々の小さな経験を通じて、日本という国の全体像を見出し、とても難しいけれど、語らねばならないと悟った日本という物語を発見したいと思いました。

#### ジョセフ・C・リン

私が子ども時代を過ごした80年代は、スクービードゥーからふわふわの賢いペットロボットのファービーまで、さまざまな米国のポップカルチャーに囲まれていたことを鮮明に覚えています。米国は常に文化の坩堝であり、外から入ってくる言葉や考えを次々に取り入れてきましたが、21世紀に入ることから日本文化の影響が明らかに強くなりました。

「アニメ」「ラーメン」といった言葉が現代の米国の語彙に定着し、ディズニーのアニメーションやパスタの影響が薄くなりました。いつの間にかテレビはみんなソニー製になり、走っているのはみんなトヨタ車になりました。米国社会にどんどん浸透する日本文化。私はその様子を見て、小さな島国である日本が、どうやって世界唯一の大国である米国にこれほど大きな影響を与えることができたのか知りたいと思うようになりました。米国文化が衰退し、日本文化が伸びているということでしょうか？

夏に日本を訪問して、その答えが見つかりました。日本がここ10年の間に米国文化に目に見える影響をもたらしたように、米国文化も日本に消せない足跡を残していました。マクドナルドやセブンイレブンといった米国のチェーンは東京などの大都市だけでなく、防府や宮島といった地方都市にまで浸透しています。日本の若者のファッションはヒップホップの影響を受けており、米国の映画を宣伝する看板が東京のあちこちに見られます。

日米間の文化交流は一方通行ではなく、共生的・循環的に進んでいます。米国で最近人気が高まっている日本のアニメにしても、初めはディズニーからインスピレーションを受けて誕生。今度は宮崎駿作品などが、ピクサーや現代の米国のアニメーターに影響を与えました。このように影響は一巡したのです。

日本はおそらく世界のどの国よりも、米国の文化や理想をユニークな形で共有しています。だから、両国の文化交流はこのような流動的に進んできたのでしょう。つまり米国が日本を尊重するのは、日本が米国に似ているからであり、米国が日本に似ているからなのです。

#### キャスリーン・マッサラ

今回の研修で最も印象深かったことのひとつは、森川先生のおたく文化に関する講演でした。自分もおたくだという森川先生は、私たちにさまざまな写真を見せながら、秋葉原の変遷やヴェニスで開催された建築ビエンナーレ「メタモルフ」に対する日本の貢献について話してくれました。特に興味深かったのは、日本政府がおたく文化の育成を表明して以来、クリエイターたちに海外で売れる商品をつくるようプレッシャーをかけるようになり、その結果、芸術性がかなり薄れてしまったという指摘です。自身もおたくであり、おたく文化の研究者でもある森川先生の分析は、ジャーナリストとして日本のソフトパワーを取材したいと望む私には、この上なく有益なものでした。

しかしながら、私にとって最も素晴らしい経験は神戸訪問でした。たかとりコミュニティセンターで被災者の方から胸が張り裂けそうなお話を聞き、そのうちのひとりと慰霊碑を見に行きました。震災直後の悲惨な状況を聞いたあとで慰霊碑の中を歩いていると、その方が生きてここにいるということに感動せずにはいられませんでした。

#### マイケル・ミラー

「暗い土の中に埋もれ、死にかけた母親に寄り添っていたのは私ではありませんでした」中島さんは眼鏡の後ろで目を潤ませ、そう言いました。「その経験をしたのは私ではなく、娘です」

私たちは神戸の、冷房が効いた涼しい部屋の中にいました。前にいるのは中島さんと成人した娘さんと瓜谷さん。1995年に起きた阪神淡路大震災の被災者です。震災時、私たちが今いる静かな街は火の海と化し、6400人以上が命を奪われました。この一週間というもの、次々と人に会い、ハードな移動が続いていたせいで、たかとりコミュニティセンターに着いたときは、みんなとにかく眠くて目を開けていられないほど疲れていました。けれども、3人の方が震災で負傷した経験や、愛する人を失った経験を話して下さるのを聞いて、涙が止まらなくなりました。

私たちが研修に参加したのは、よりよい海外特派員になれるよう、日本の文化、政治、日米関係について学びを深めるためでした。東京を忙しく見学して回り、もうすぐ行われる選挙、日本のポップカルチャー、日米地位協定について興味深いお話を聞かせていただきました。これらを通じて、私は日本に関する記事を書くために必要な基本知識をようやく得ることができたと思っていました。

しかし、麦茶を飲みながら毎日新聞の中尾記者の話を聞くうちに、優れた報道をつくるのは、このような悲しみや喜び、失敗や成功を語る人間ひとりひとりの物語であるという思いを新たにしました。結局のところ、ジャーナリズム大学院生招へいプログラムの目的は、私たちに日本を完璧に「理解」させることではなく、海外の読者に、見落とされがちではあるけれど、日本人の生活を伝える上で重要な物語を、自信を持って伝えられるだけの知識を与えることなのです。

今がジャーナリストにとって、厳しい時代であることは間違いありません。特に海外特派員を目指し、ジャーナリズム業界になんとか入りたいと希望する若者にとっては3倍も厳しい時代です。そんな時代に、他国についてこんなに短い間にこれほど多くを学ぶことができたのは、かけがえのない体験でした。正直言って、10日間の研修旅行がこんなにハードだとは思っていませんでしたが、これほど実り多く楽しいものになるとは想像していませんでした。

ただ、来年度のプログラムをよりよいものにするために、CGPの皆さんに、2、3改善していただきたい点があります。第一に、自由時間を増やしていただきたい。夕方か夜だけでもいいですから、もっと自由時間があれば、疲れを溜めないで元気に研修を乗り切ることができますし、自分たちの経験を書きとめたり、ブログで発信したりできるのではないのでしょうか。個人的には、米国で出版するために、日本での素晴らしい経験を記事や旅行記にまとめる時間があればどれだけよかったかと思います。

第二に、学者や政府の官僚だけではなく、中島さんたちのような一般の人々の話を聞く機会を増やしていただきたい。そうすれば、参加者たちは現代の日本の姿をより深く、正しく理解することができるでしょう。例えば、米軍横須賀基地と米国大使館を訪問したことで、日米の軍事関係に対する理解が深まり、貴重な洞察を得ることはできましたが、日本の一般の人々が国内にいる5万人以上の米兵の存在についてどう感じているかはまったくわかりませんでした。

最後に、現代の日本の「暗い」側面について知る機会があれば有益だと思います。例えば、日本の記者の皆さんに会い、地方のドサ回りから始めたという話は聞きましたが、日本における犯罪の構造や、犯罪で利益を受ける人々については、まったく知ることができませんでした。

国際交流基金日米センター、エマーソン大学の皆さん、このチャンスを与えて下さり、ありがとうございました。海外特派員として働き始めるには厳しい時代ですが、優れた報道の価値を信じる人々と制度があるとわかったのは大きな収穫でした。

大震災の経験談を聞かせてくれた瓜谷さんは、文通相手に手紙を書くことで信念を失わないようにしていると仰っていました。私たちも彼のように、まだジャーナリストが必要とされていることを忘れないようにしなければなりません。この招へいプログラムから私が得た収穫は、質の高いジャーナリズムが今でも求められているということ思い出せたことでした。



参加者たち

サンドラ・ガルシア、マイケル・ミラー、キャスリーン・マッサラ、  
ヘーリー・エドワーズ、ジョセフ・リン、キャサリン・クリクスタン（左から）



NHK のスタジオにて

クイズを楽しむサンドラ・ガルシア、マイケル・ミラー、ヘーリー・エドワーズ（前から）



原宿にて  
クレープを手に散策を楽しむキャサリン・クリクスタン



米軍横須賀海軍基地にて  
ダニエル・ウィード司令官（前列中央）、  
米国国際関係専攻大学院生招へいプログラム参加者と一緒に



築地市場にて  
サンドラ・ガルシアとキャサリン・クリクスタン（前から）



日本外国特派員協会の夕食会にて  
特派員たちから有益な話を聞く



神戸の慰霊碑を見学  
被災者のひとりに阪神淡路大震災の犠牲者を記念して建てられた慰霊碑を  
案内してもらう。感動的な体験だった



姫路城にて  
見学の前にグループで記念撮影



京都にて  
サンドラ・ガルシアと舞妓さん



八坂神社にて  
立ち止まって景色を楽しむマイケル・ミラー



